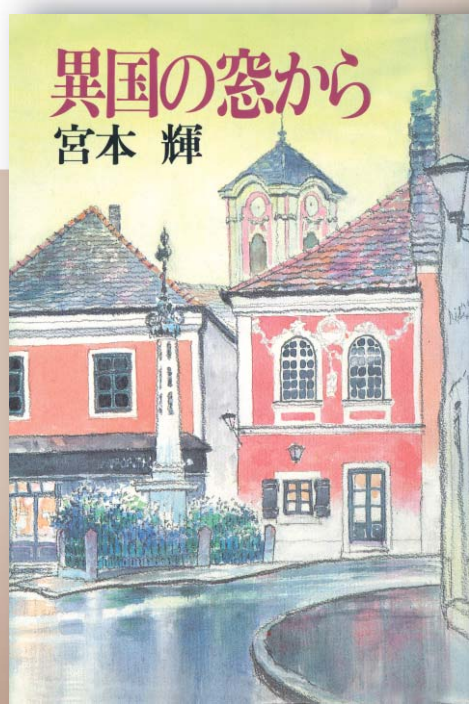


家なんか建てず、  
世界中を何年もかけて  
旅行したらいい、  
それはいつか何十倍にもなって  
返ってくるだろう。



1988年 光文社

## Story

「異国の窓から」は、宮本輝氏が自身初の新聞連載小説「ドナウの旅人」（1983年～1985年連載、1985年 朝日新聞社刊）を執筆するにあたり、1982年に取材旅行として東西ヨーロッパを訪れた際の紀行文である。宮本輝氏にとって初めての海外体験であるということに加え、冷戦時代の東欧という特殊な地域を横断する旅行であり、そこで見たものや感じたことが色鮮やかに描かれている。また旅行中でのエピソードのいくつかは、「ドナウの旅人」にも引用されている。

## この旅から生まれた作品



「ドナウの旅人」  
1985年 朝日新聞社



「葡萄と郷愁」  
1986年 光文社



「彗星物語」  
1992年 角川書店

宮本輝氏は「ドナウの旅人」の取材旅行中、ブダペストでハンガリー人の青年に通訳を頼んだ。日本で学ぶことを夢見ていたその青年は、翌年留学のため来日し、宮本家で3年間を過ごした。この取材旅行がきっかけで青年との新たな出会いがあり、その出会いが軸となって「葡萄と郷愁」（1986年 光文社刊）と「彗星物語」（1992年 角川書店刊）が描かれた。こうして一つの旅から趣の異なる三つの作品が生まれた。

## 旅は度胸

冷戦時代、東ヨーロッパでは、隣国に行くだけでさまざまな制約があったのに、その中で宮本さんは「大阪弁」を駆使しながら悠々と旅をつづけていく。現代では考えられないこんな不便でめんどろな旅を、ちょっと経験してみたいような、うらやましい気持ちになりました。

Review